

卒業終業礼拝

3月10日、チャペルにて平成23年度卒業終業礼拝が執り行われ、小学部3名、中学部16名、高等部33名がそれぞれの課程を終え、卒業しました。



立教英国学院通信

祝辞

在英日本大使館 総領事

今村 朗

立教英国学院小学部、中学部、高等部の卒業生の皆さん、本日はご卒業おめでとうございませう。また、お子様方の成長をここまで見守り、今日この日を迎えられるました保護者の皆様、先生方、心よりお慶び申し上げます。

皆さんはこの立教英国学院で色々な思い出を残して卒業されます。先ほど糸魚川理事長からも、人と人との絆を大切にしましょうというお話がありましたけれども、皆さんには、ここ立教英国学院で様々な経験をし、クラスの仲間や寮の同じ部屋の友達と過ごした楽しい思い出があると思います。

そうした中で、一つ忘れてはならないことがあるとすれば、今日の礼拝でお話がありましたけれども、東日本大震災のことでしょう。明日三月十一日は震災が起きてからちょうど一年になります。私が仕事をしております大使館でも震災の時に色々と助けて頂いた日英の関係者の方をお招きして、追悼の式典を予定しております。これも先ほど音楽の賞品授与の時に話がありました。震災に関連してチャリティー・コンサートに参加したり、被災した方々を助ける活動に取り組んだ生徒の皆さんもたくさんいると思います。そうした中でイギリスの方々から本当に温かい言葉ですとか、ご支援を頂いたということをご皆さんそれぞれ感じたと思います。

第二百六十号 二〇一二年三月二十一日
発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

震災では多くの方が亡くなり、多くの方が被災しました。日本にとって震災は本当に大変なことでした。一方で、イギリスで勉強し、イギリスの人々と交流して、イギリスの先生から教わった皆さんは、震災が起きたという状況の中で、暖かい手を差し延べてくれたイギリスの人たちとの絆も同時に深まった一年であったのではないかと思います。ですからこれを是非大切にして頂いて、これから卒業しても是非その絆を活かして頂きたいと思っています。

今日は私のほうからひとつお願いといひますか、お話があります。それは、『夢を大切にしたい』ということですね。今年はロンドンオリンピックの年です。もう大分前ですけど一九八四年にロサンゼルス・オリンピックがありました。まだ皆さんが生まれる前だと思ひますが、この時に柔道の金メダルを取った山下泰裕さんという方がいます。私は彼とお会ひした事がありまして、「どうして金メダルを取ったんですか？」という事を質問したことがあります。そうしましたら彼は、自分は中学二年の時に作文で「大人になったら柔道のチャンピオンになってオリンピックで金メダルを取りたい」という趣旨のことを書いたという話をしてくれました。そういう夢を自分を持つてあきらめなかったから、だから金メダルを取れたんだというお話がありました。

皆さんもきっと「大人になったらこういうことをしたい」、「こういう人になりたい」という夢があたりだと思ひます。決してその夢をあきらめないで、是非その夢を育てて、夢を持ち続けて下さい。山下さんは、「その夢をあきら

一 目 次

	ページ
卒業終業礼拝	1～6
祝辞	1～2
卒業生スピーチ	3～5
退任された先生・職員の方々	6
3学期の行事	2
立教歳時記「雪どけ」	7
アウティング	8～9
レ・ミゼラブルを見て	8
交換留学生が本校に	9
英語科プロジェクト	10
社会科プロジェクト	11
第7回 チャプレンより	12



高3 集合写真

めなかったから自分はチャンピオンになれたのだと思う。」というふうには私に言われませんでした。今日、卒業するに当たって皆さんは新しい一歩を踏み出しますけれども、是非もう一度、自分はどんな夢を持っているのか振り返ってみて、その夢をもって前に進んで頂きたい、というふうに思います。今日こちらに来る時に途中で日本の桜に似た木が家々の庭に咲いていました。もう春が来たんだなと思いました。この素晴らしい環境の立教英国学院でも、自然が皆さんの卒業をお祝いしているようです。

どうか皆さんが素晴らしい夢を持ち、その夢を持って新しい一歩を踏み出すことを祈念しつつ、私の祝辞とさせて頂きます。おめでとうございます。



今村総領事によるスピーチ

立教学院理事長・立教英国学院理事会議長

糸魚川 順

皆さんご卒業おめでとうございます。

また、ご列席のご両親を始め、皆様に心からお祝い申し上げます。まず、卒業生諸君へお願いしたいことがあります。それは今までいづくしみ、育んでくださり、永年に亘り授業料を払っていただいたご両親様に対し、この節目に際し、感謝を申し上げてほしい。

大学の卒業証書を、郷里に戻って父親に見

せた時、父親は笑顔で唯一言、「ずいぶん高くついた領収書だな。」と言われた人がいます。また、自分の子供を学校に出すようになって、親の苦労と愛情を改めて痛感した人がいます。

さて、諸君の多くは大学へ進まれると伺っていますが、大学とは一体何をやる所か、今のうちからちよつと考えてみたい。入学案内を読むとほとんどの大学は、「専門性のある教養人」を育てることを目標に掲げています。専門性ある教養人を説明する際、私はギリシア時代医者の子孫といわれたヒポクラテスを例にします。著書『弟子との対話』の中に、「先生、医者とはどんな人間を指すのですか？」の問いに対し、「医者とは、病気を治す人だよ。」弟子は続けて「それだけですか？」ヒポクラテスは、「良い質問だ。医者とは病気を治す人であり、病人を治す人である。」と答えた。ご承知の通り、医者は病気を治す為に、外科、内科等の専門的知識が必要であると同時に、患者とコミュニケーションを深め、信頼関係を築くことにより、生活習慣を把握し、原因を探る幅広い能力——いわゆる人間としての教養——が求められます。

教養とは何か、教養人とはどんな人であるか、大学での専門科目はもとより、歴史、文化、社会等広汎な知識を、知的好奇心を持って、身に付ける大学生活を積極的に過ごしてほしい。努力最後のレジャーランドと考えないでほしい。世に教養人といわれる人は、いかなる青春時代を過ごしたかという、一月十五日の日曜礼拝の際、少しお話ししましたが、

①人との出会いを大切にすること。

そこには、衝突や面白くないことも度々あるだろうけれども、タイプの違う人間と一緒に

過ごす時間は、きつと諸君を成長させてくれると思います。寮生活を過ごした諸君は既に十分な経験をつんでいると思います。

②本との出会いを積極的に持つこと。

本は自分の経験を何十倍にも広げてくれ、且つ知識と思考力を付けてくれます。

③自然との出会いを大切にすること。

美しい自然は、多くの感動を与えてくれますが、一瞬にして何千、何万の尊い生命を奪う恐ろしさがあることは、言うまでもないことです。

これから迎える四年間は、人間として最も成長する期間です。これから中学校、高校に進む方も含め、最後に一言、くじけず、あきらめず、自信を持って、そして皆さん、GOOD LUCK!



チャペルにて全校生徒の前でスピーチをする糸魚川理事

【3学期の行事】

1月7日	生徒帰寮	2月5日	TOEIC・TOEIC Bridge の資格試験
1月8日	始業礼拝	2月6日	アウティング
1月9日	高等部実力テスト	2月7日	生徒会役員選挙
1月14日	生徒会主催ショッピング	2月7～12日	Wolverhampton School より 交換からの留学生生滞在
1月15日	大学センター試験[英語]を全校で実施	2月12日	第64回漢字書き取りコンクール
1月21～22日	英語検定一次試験（2級以下は本校で実施）	2月19日	英語検定二次試験
1月22日	全校新春かるた大会	2月29～3月5日	期末考査
1月27日	INGFIELDMANORSCHOOL 訪問、観劇	3月10日	卒業終業礼拝、生徒帰宅
1月29日	ギター部コンサート	3月10～17日	ホームステイ
2月4～7日	ブレイク	3月12～17日	高等部2年生補習
2月4～5日	チチェスター音楽祭		



小6・中1で近くの丘へ散歩に出掛けたとき

卒業生スピーチ



小六 櫻澤 菜奈子

四月から通い始めた立教ですが、もうすぐで一年がたとうとしています。

初めて来た時、みんな上級生でしかも私より背が大きくて少し怖かったのが印象的です。でもみんな、「こんにちわ」とか、「新入生の方ですか」等と話しかけてくれて安心したのを覚えています。

ドミトリーに案内された時、私はハリイポッターの世界に迷い込んだようでした。広々とした吹き抜けの高い天井。高い天井から真ん中に下がっているキラキラしたシャンデリア。シャンデリアの下には白くてかわいいピアノ。ピアノの横に置いてあるのは、テレビを囲んだ大きなソファ。そして、木のドアがたくさん並んでいます。私にとって夢のような世界に感じ、こんな場所生活できるんだと思うと、とてもうれしくなってきました。「あなた達のドミトリーは二階です」と案内され、重たいトランクを持って母と、ほかの新入生と階段を上りました。二階にもやはり同じく木のドアがたくさん並んでいます。そのたくさん並んでいる中の『ドミトリー3』という六人部屋が私達の部屋でした。部屋に入ると、六つのきれいなベッドが並んでいます。しかし、一つだけベッドの上と周辺にトランクやものが沢山置いてあります。私が誰だろう?と不思議に思っていると、ドミト

リーに新入生ではない子が一人入ってきました。すると先生が「この子が岸田さんです。小五からいるのでわからない事は何でも聞いてください。」と紹介してくれました。岸田さんも「よろしくね。」とやさしく声をかけてくれたので、なぞが解けたとともに不安もなくなりました。すると、みんなも少し不安や緊張が消えたみたいで「名前は?よろしくね。」等と新入生同士でも会話が普通にできるようになってきました。

大きなトランクをあげ、荷物をだし各ロッカーに詰めていきます。時計を見ると後二時間で父母が帰る時間です。私は急に不安と寂しさがまたよみがえって急に悲しくなってきました。そして、図書館で説明会の時間になったので図書館に行きました。フライデースポーツの確認やネクタイを受け取り、次は始業礼拝の時間です。始業礼拝では、校章を受けとり、校長先生の話の聞いたりして終わりました。

時計を見ると四時。後三十分で父母が帰る時間です。しかし、そこまで悲しくはありませんでした。みんなと夢の世界で一日中過ごせるすばらしさを感じられてきたからです。そして四時三十分。タクシーが迎えに来ました。ほんの少しだけ寂しかったのですが「またね」と笑顔で見送ることができました。それからどんどん時が流れていき、今はすっかり立教生として生活しています。わからないこともだいたい減りました。今は、逆に教える側です。

来学期のまだ何もわからない不安な新入生に岸田さんのように優しく教えられたいと思います。

さきほど、水泳の賞をいただきました。これは苦手な種目もありましたが、その種

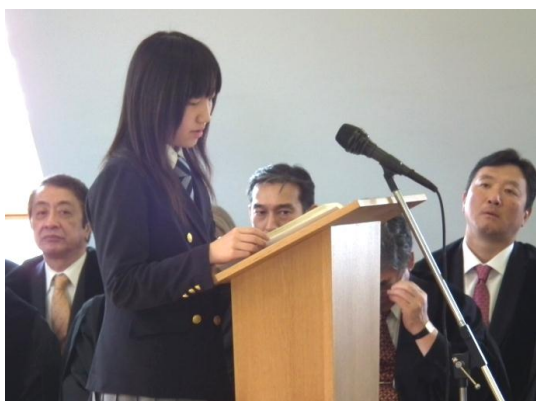
目を特に頑張つて、全員合格することができました。

私達は毎週月曜日に水泳の授業があり、今学期は小六の三人でシルバーを受けました。シルバーというのは八百メートル、スカールリング、立ち泳ぎ三分間、百メートルを三分以内という項目でした。

ところで私は、四月から新しく始めたことが二つあります。一つ目は、バイオリンです。一年間習ってきて、バイオリンの楽しさが、わかりかけてきたので、さらに練習を続けていきたいと思っています。

二つ目は乗馬です。日本ではなかなか出来ないスポーツです。初めは乗った瞬間に足が震えて、とても怖かったのですが、馬に乗って歩いたり、走ったりしているうちに、気づいたら「怖い」から「楽しい」に変わっていました。金曜日のフライデースポーツの時だけでなく、機会があるときはどんどんチャレンジしていきたいです。

これから、中学、高校と学んでいきますが、前向きに各々自分の夢、希望に向かって、進んで行こうと、考えています。



I'd like to finish by saying that I will be so sad to depart from my friends and younger students who I spent more time with than my family as we all go our separate ways. And also sad that we will never again gather at this school.

I still can't believe that today is the last day that I will be here. But

occasionally it is necessary to say farewell. I also want to say thanks to the teachers, my friends and my family.

I said in the first part of my speech, we couldn't do what Japanese teenagers normally did. But we could do what Japanese teenager never experience and learn the

important thing that I can acquire only in this school. I'm sure that I've become stronger mentally and physically through the experiences in this school. I will never regret coming to this school. I wish everybody here success in their future. Thank you very much.

中3 山田 直史

Hello. Now, I will talk about my life and friendships in Rikkyo. Please ignore my grammar and speaking mistakes.

Well, I came to Rikkyo when I was middle school 2nd grade, about 2 years ago.

Now, before I talk about my life in Rikkyo, I'll talk what I thought about Rikkyo, before I came here.

Before I came to Rikkyo, I heard that student had to pray every morning, they couldn't go out whenever they wanted, and they had many table manners, and so on. So, to tell the truth, I wasn't looking forward to coming here. And when I came here, as I expected, I got confused about the rules. The thing that I got most confused about was the atmosphere. I couldn't join in to their atmosphere, and I had a hard time to join in with them. But in the meantime, there was an eruption in Iceland, and many students couldn't come to entrance ceremony, so I had a time to speak with them one by one, so I can join in with them. And now, I have many friends in many grades. I'm really glad of it.

Now, let me talk about my 15 classmates. There are 8 boys and 8 girls including me.

They are cheerful, and sometimes clever. We are always fooling around, but they are good students, whenever they should be, I suppose. There is a girl who is always talking about animations. She always sings in the classroom. Listening to her, and enjoying it, is the girl who can speak brilliant English, better than me. Third, there is a boy who is very shy, so he can't speak with the girls for a long time. He's very good at football too. There are 2 more classmates who are good at football. One boy, who came this term, is very polite. The other boy always makes us laugh. There are 3 classmates that are so funny, and always in the centre of us. They are 2 girls and 1 boy, and they are very good friends to each other. By the way, in our classroom, there is a giant, and a barbarian. The giant, is over 185cm, and very good at computer. I think he could be an engineer. And the barbarian is the nickname for the girl who is very energetic, but unfortunately, she has a disease on her leg. I hope she will be fine soon. We have a painter in our classroom, too. He's very good at painting, and he is always thinking about enjoyable things. I respect him very much. Also, there is a girl that I really respect.



She's so intelligent, and good at playing sports. I have never seen such a clever girl. On top of that, there is a girl who is absent-minded all the time. But she's very friendly, and gave us lots of advice. I can never thank her enough. There is a girl who is always sleeping in the classroom. She is very boyish, and it's very fun to talk with her. At last, there is one more boy, who isn't here for now. He's compared to a sun. He always shines on us, and makes us happy.

Well, I did many things with them. I got happy sometimes, and got mad sometimes. There are good memories, and bad memories. And when I think about those memories, I reach to a word which is [thank you]. I had many memories because of my classmates. I couldn't have many happy memories without them. I want to say a huge thank you.

I want to say thank you to my older students, younger students, and also to the teachers. I gave many troubles to them, especially to Mr. Koda. He's my homeroom teacher for 2 years and taught me many things. Really thank you.

So, I'm really proud to meet these wonderful people, and I'm really proud to graduate from this school. I'll never forget these 2 years, because these 2 years were so special to me. And finally, thank you to all of you for listening to my long speech. Thank you.



ウィンブルドンテニス観戦にて

Graduation Speech

高3 澤本 篤志

Good morning everyone.

I'm so glad to be with you today and to be standing here. It was four years ago when I entered this school. I remember feeling so glad of the opportunity to come to England and experience a new environment which is completely different from Japan. As you know, the school premises are so vast and surrounded by open fields, cows, horses, wildlife etc. This school is filled with things that I never experienced in Japan, especially in Tokyo.

I clearly remember the day before coming to England. My eyes refused to close and my heart was full of expectation like a child who is waiting for their birthday presents. But expectation and reality are not always the same. This school was no exception.

Our time was organized strictly and we were given a considerable amount of time to study which made me feel frustrated. We were not allowed to bring snacks from Japan. We were not allowed to go into other people's rooms. And we were not allowed to even have girlfriends.

In Japan, teenagers like me spend time just having fun or just talking with their friends. We couldn't do what the Japanese teenagers normally did. Actually I regretted coming here at first because it was too hard for me to adapt to life here. However, I had no choice but to follow the rules like "when in Rome do as the Romans do". But as I got used to the life at RIKKYO, I found that there were many positive things aside from the disadvantages.

My year particularly loved events like OPEN DAY or SPORTS DAY. Every time these events approached, we used to prepare extensively and were very excited. It was rather strange because we loved these events so much. Actually I don't remember studying any subjects before entering grade 3 even though there are clear memories about events in my mind. In the run up to OPEN DAY, there were no classes and no self studying. I think this

time was the time when we had the most freedom. But this freedom didn't mean that we could do whatever we wanted. In this limited period we concentrated on coming up with innovative ideas and developing our creativity. Sometimes big arguments occurred between students because of each students' very strong opinion. However eventually we forgot all about that and focused on our WORK. Thanks to these experiences we made BRILLIANT things with no regrets.



The OPEN DAY which we worked on together and spent so much energy on will remain in my mind forever. Another time which I remember well is SPORTS DAY. I especially remember this day because it was the last big event I ever attended at RIKKYO before going through the hell of study. The memory of sports day is so profound that it can be somewhat emotional to revisit it. We had been practicing a lot and had spent a lot of time on it.

But sports day itself came astonishingly quickly. It was like a dream. Everyone looked as though they felt satisfied and fulfilled after the day. I know the English expression which says "it's not about the winning, it's about the taking part". But I disagree with that because I believe in that most of the satisfaction gained from sports is in the desire to compete and win. Two things equally important for life in general. So I really want the younger students to participate fully

in sports days and make great memories.

To tell the truth, I have been very nervous ever since my teacher told me that I was going to make a speech at this graduation. I'm talking in English now, it's so strange for me and for you. When I came to this school, my English was really bad. I've never been to international school or local school in England. I couldn't speak English at all. Actually I even found it difficult to ask the way to the station in English. I'm not joking. If I look back, it's hard to believe I'm standing here and making this speech. But the one thing that really helped me was that I liked speaking English. It's so cool, isn't it? But it doesn't matter why you like it as long as you do. Motivation is somehow connected to the improvement of English. People often mistakenly believe that they will be able to speak English by just staying in an English environment for a year. To my mind though, as long as you are reluctant to learn English, you will never become a good speaker. This is a conclusion which I arrived at through experiences in RIKKYO school. I really appreciate this school giving me opportunity to keep in touch with English and teachers who taught me English. I'm really glad to speak in English in front of you and EC teachers.

Finally, I will never say that everything in this school was positive and enjoyable. There were many things I couldn't manage alone and struggled to get over. But every time I confronted some difficulties, my beloved friends helped me and cheered me up. The time I spent in this school is unforgettable and unfortunately will never be repeated. Irrespective of our year's reputation, I'm nevertheless proud of my year and proud of my friends. If I hadn't come to RIKKYO school, I would have never met them. It made me think that it was a good decision to come here.

退任された 先生・職員の方々



今年は、6名の方が退任されました。左から添田保彦先生（地理 36年勤続）、梅澤司先生（国語 5年勤続）、ミセス・ウッド（校長付き秘書 17年半勤続）、男子寮のクリーニングレディースとしてミセス・ダッドマン（22年半勤続）、ミセス・ジョスリン（7年半勤続）、ラッセル先生（G.C.S.E. Biology 11年勤続）。長い間ありがとうございました。

あの日から始まった

一九七六年四月六日、立教女学院で働いていた私が地理の教師としてここに呼ばれ、ヒースロー空港に降り立った夜八時頃、空港は薄汚れて見えた（当時空港は古かった）。怪しい気持ちがあったのを覚えている。時差で学校に着くまで眠りかけていた。寮の四人居る部屋に同僚となる二人の教師がいた。荷物を少し整理して十一時頃床について。翌朝、八時頃起き、宇宿先生の所でトーストとベーコン（だったと思う）をおいしく頂いた。その後、長袖セーターで外に出て歩いた時、日本の高原の様だなど思うと同時に、こんな所に来ちゃった、静かで空気が軽井沢のようなのはいいが、静かすぎる、何もない山村のよう。夜は真っ暗でお先真っ暗、こりや二年で帰ろう」と思ったのを覚えている。

その後、教室整理、ベッド運び、校内清掃等一週間で学期が始まるまで働いた。学期が始まると中学二年生の担任となった。全校生徒数は九十五人、高校生は五人いたが、その当時は正式に文部省の許可は受けておらず、その学年が高三になって初めて正式に日本の高校と同じ資格になった。最初の二年はがむしゃらで徹夜に近い時も多かった。生徒も教員も殆ど何もないところから創っていった。宇宿先生の提案で初めての球技大会が五月に行われた。今と違い、女子の方が少なかったせい、女子は物足りなさそうにしていて。翌年、中学修学旅行が初めての海外スイスになり、担任として付き添ったものの、入国の時に生徒に仏語を手伝ってもらった。天気も良く、素晴らしい楽しかった。一九七七年、女王のシルバージュビリー（即位二十五周年記念）で、生徒が貼り絵を作り、ロンドンの宮殿かまたはどこかの展示場に持って行った。今年、ダイヤモンドジュビリー（即位六十周年記念）の年に退職することになったのが感慨深い。

二年で帰るつもりがあつという間の三十六年。短かったような、いや長かったような。思い出すのは生徒と過ごした日々。色んな事が起き、思った日々。生徒がいたからこそまで来られたのだと思う。（反面教師でしかなかったかも）生徒に一番感謝している。英国の自然・鳥・羊・きつね、リスさんにも同じく感謝して、さようならとありがとうを言います。

皆さん、お元気で。

添田 保彦



From

Mrs. Wood

I initially came to Rikkyo as a part-time English teacher 18 years ago, and was delighted to be offered the position as Headmaster's Secretary the following year. I have always enjoyed coming to the School in its beautiful setting and experiencing all the seasons here, particularly the Spring, when the cherry blossom is so spectacular.

Everyone I have worked for has always been appreciative of my efforts and, although sometimes demanding, I have always found my job very interesting. I love the calm atmosphere here, with occasional bursts of exuberance from the students – always a delight to hear.

I am looking forward to spending more time with my grandchildren, although I will miss the School, so I plan to return for concerts and Open Days.

My one regret is that I didn't make an effort to learn Japanese, beyond the essential phrase, when answering the telephone to a Japanese speaker, "Sho sho omachi ku dasai!"



From

Mrs. Russell



I would like to thank the staff and students for making my 12 years at the Rikkyo School very happy ones. I have always been amazed at the students' determination to achieve the very highest of academic standard – and in a foreign language!!! I have to admit they have been very supportive in my lack of ability in learning more than a few words in Japanese. What I will miss most is their sense of humour and eagerness in answering questions. My time with them has enabled me to have an insight into the Japanese way of life and unique culture. It is a culture that produces an inner calm and tranquillity. I leave with the fondest of memories.

雪どけ

『雪どけ』と聞くと、思い浮かぶのは春の訪れではなからうか。二〇二二年の立春、イギリス南部では二十センチをこえる積雪があり、真冬に逆戻りした。そのあと二度ほど降雪があり、約二週間にわたって零下が続くほど冷え込んだ。

さて、雪がふればとける時がくる。雨が降っても雪がとけても、水は地中に沁みこみ、地下水を形成する。ふんだんに水を含んだ土壌は、多くの生物の住処となり、植物を育てる。



という理解でよいのだが、イギリスでは少し違っている。どこが違っているのか？水は地中に沁みこみ……というところである。

イギリスでも雨水や雪解け水は地中に沁みこんでゆく。だが、日本でイメージするものとはだいぶ異なる。日本の土壌は水はけが良く、掘り返してみると、やわらかく、ほろつとくずれる。イギリスのこの地方の土は、さながら粘土である。掘り返せば、カタマリのまま。粘りがつよく、触れた手からみつく。レンガ文化が生まれたわけである。

このような地質のイギリスでは、雨水や雪解け水が土に沁みこむといっても日本ほどの量はない。ちよつと大雨が降れば水たまりができ、川は水量を増してあふれ、土地を浸す。アスファルトの車道に通行を妨げるほどの大きな水たまりができる。これをFLOOD（フラッド）と呼び、こちらでは大雨のあと、FLOOD注意の看板がよく立つ。

このような降雨や雪解けとFLOODの関係を知ったイギリス人は、「川からあふれる水を逃がす土地」を用意した。学校の近くのギルフォードには、このような土地がある。ラグビー場の隣に、雑草が生える広い草地がある。ふだんはゆつたりと牛が草を食む姿が見られるが、一度豪雨がやってくると、隣接するウエイ川からあふれた水で、風景は一変、突如として湖が誕生する。

これを目の当たりにしたときの驚きは非常なものである。山岳地帯を中心に成り立



つ日本列島出身者にはこのような土地利用法が存在するだろうか。

私たち日本のひとびとは、昔から川を制御しようとしてきた。水はけのよい土壌、傾斜の激しい土地は、山脈にぶつかって降った雨が川を流れて下流へあふれてゆく。特に夏に多いこの災害に備えるため、高い堤を築き、農地や家々を守るうとしてきた。その一方で水の恵みに感謝した。激しく荒れ狂い、山野を蛇行し、そして恵みをもたらす川は、中国では龍のイメージを生んだ。龍は水をつかさどる伝説獣として私たちの文化に浸透した。

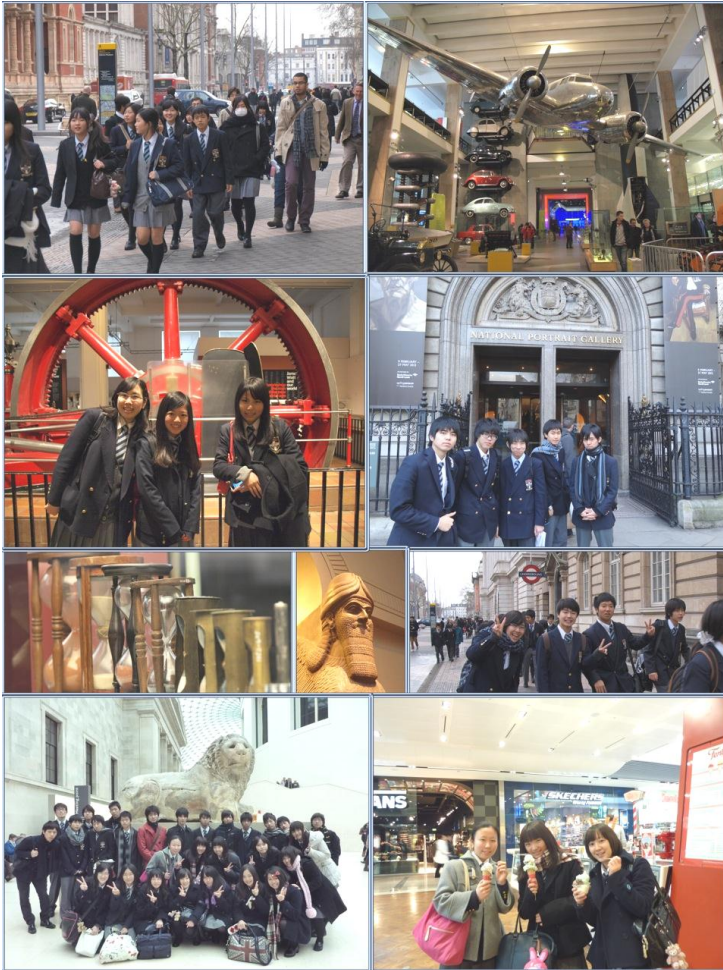
水はけのよい土壌は土砂くずれを起こしやすいが、粘土質の土壌は水がたまりやすく床下・床上浸水を起こしやすい。数年前にイギリス北部では大規模な床上浸水が起こった。日本では堤を築き、イギリスでは水を逃がす広い土地を用意したのであろう。FLOODの代表的な日本語訳は「洪水」である。洪水といえば、水量を増して荒れ

狂った川から水があふれ出し、勢いを増して流れ去ってゆくイメージではないだろうか。イギリスのFLOODは床上浸水のような極端なケースを除けば、今まで自然のままであったフィールドに湖ができ、ひたひたと水がたたえられるイメージである。言葉からうかがう印象もところ変われば変化するのである。

一週間の冷え込みのあと、イギリスのあちこちではたくさんFLOODが出来たことだろう。雪どけによるFLOODは、春の先触れなのだ。

立教歳時記





毎年3学期に
全校でロンドンへ外出！

アウテイング



高二のアウテイング

高二 藤木 紫苑

今回のアウテイングはとても充実して忙しく歩き回った印象です。まず始めに行ったショッピングセンターは全てがまだ新しいというのがよくわかり、二歩外に出ればオリピックの会場も見えて大都市の中心にいる感覚にとってもワクワクさせられました。ワールドフードコートで食べたお昼は、班のメンバーがそれぞれ違った他国籍の料理を注文して食べ比べたりして満足できました。色々な洋服屋さんや雑貨屋さんがある「時間があれば…」と言いながら広いセンター内を歩き回るうちに、もう集合時間がきてしまい…。ショッピングセンター内はもちろん、周辺の

オリピックに向けての変化などが見れてとても良い時間が過ごせました。

ロンドン中心部へ移動し見学しました。大英博物館では、世界史の授業が近代まで進んだことで、博物館内にあるものの歴史的な重要さなどがわかった上で見ることで、今まで訪れた時とは違ったより深い観点で見ることができました。ワークシートを埋めることで、一杯、それも間に合いませんでした。歴史をビジュアルで学ぶことができて、より一層理解が深められるような気がしました。一番インパクトがあったのは、世界最古のミイラで、本当に本物なのだろうか！不思議な気持ちでした。ロゼッタストーンを見た時は「これだ！」という嬉しさもあり、こんなに簡単に見られていいのかと思いつつ、ショーケースに張り付いて見ていました。時間がなく行けなかった部分もあったのは残念でしたが、とても有意義な時間を過ごせました。

レ・ミゼラブルは、部分的には知っていたけれどシアターで見たことがなかったの、自分のイメージと合うところと違うところが発見できて楽しかったです。マンマミーアやその他のミュージカルよりは、歌が見せ場のドラマに近いように感じました。個人的にはダンスシーンを見たいと思っていたけれど、キャストの歌のすばらしさで改めて舞台の楽しさを感じました。「On my own」も大好きな曲だったので感動しました。一日中時間に追われてバタバタしていたアウテイングでしたが中身がいっぱい詰まった楽しいアウテイングになりました。次は最後のアウテイング…。今から計画を立てようと思います。

レ・ミゼラブルを見て

「下向け、目を合わすな。下向け、仲間を見ろ」

幕開けは、囚人達の暗く重い、辛い労苦を耐え忍ぶ声だった。警官と目が合ったら、それだけで鞭打たれることが分かっているのだから決して目を上げるな、と言っているのだ。当時の情勢をよく表わしている始まりであると思う。

ジャン・バルジャンは、元々心根の優しい少年だった。彼には妹がいたが、家が貧しかったためパン一切れを買いお金の余裕もなく、妹を飢え死にさせない為にパン一切れを盗んだのだ。彼は逮捕されるが、妹や家族を思い何度も脱獄しては捕まっていた。19年経ち、仮の自由を手に入れてからも彼は人の為に自ら人生を歩んでいく。

もし、彼が貧乏な家の生まれではなく、中流もしくは上流階級の生まれの者であったなら、彼はどのような人生を送っていたのであろうか。権力やあり余る金銭を駆使して、社会の弱者に尽くしたのであろうか。そういうこともあるかも知れない。だがしかし、私はそうではないと思う。彼は辛く苦い経験をしたからこそ、そしてその上であの立派な司教と出会ったからこそ、彼の人生は最後美しく輝いていたのだと思う。

妹のためにパン一切れを盗みさえしなければ、彼は19年も肉体的にも精神的にも、あそこまで傷付けられることはなかったかも知れない。だが19年苦しんで一人ぼっちにならなければ、彼はあの司教と出会うことはできなかった。そしてその司教のどこまでも強い優しい心に触れ、彼自身があそこまで輝くこともなかったのだ。

経験する苦しみや出会う強さ優しさの形に違いはあるだろうが、これは今も昔も全ての人に当てはまることだ。苦しんだり、傷付いたりするから、人は人の優しさを知ることができるようになるのだと思う。そして優しさを知ったから、人は人に優しくできるようになるのだと思う。ジャン・バルジャン。彼は良きキリスト者であった。私は時々、彼が天使にすら見えてくる。彼のような立派な人間になることは難しいかも知れないが、せめてどんな人にも分け隔てなく接し、忍耐強さと優しさを少しでも多く持った人間になれるように、人を笑顔にできるよう日々努力していきたい。

(高2 山本 優子)



アウテイング。立教生にとっては素敵なイベントである。三学期の約半分が過ぎた頃にある数日間のブレイク。プレイク三日目がアウテイングである。私は、サイエンスミュージアムとストラットフォードシティーにあるショッピングモールに行った。一日を立教の外で過ごすのは怖くもあり、楽しくもある。色々な体験が出来た一日だと思う。

最初に行ったのはサイエンスミュージアムである。外見、とても古くて色褪せている印象の建物なのに、中に入ると展示物も会場も現代的で明るく、美しい。私は事前に授業でフライトギャラリー

触れることの大切さ

中二 松田 祐理子



ンスミュージアムには詰まっている気がした。

ショッピングでは、色々な人に会う。様々な人種の人が集まり、人それぞれに楽しみ、帰って行く。私はここで、「流行」している店の凄さを感じた。巨大な店舗という部分では同じなのに、人がたくさんいる所と少ない所では雰囲気から活気から全てが違うのである。人が沢山の店舗に行くレジが見えやすい所にブラットと二十個くらい並び、スムーズに事が運ぶ様に工夫されている。店員も沢山いて気軽に開ける。人があまりいない所ではレジは一番奥に一つあり、店内は暗くて凄く音量で音楽がかかっていた。ショッピングモールだからこそ分かる違い。それを感じた。また、そこで楽しくショッピングすると気持ちが明るくなった。

今回私が感じたのは、現地だからこそある壮大さと感動である。行ってみなければ何も分からないんだな、と感じた。これはやることや物が違っても共通することだと思う。何でも実際にやってみることで得る物は、何もしないで行くより、ずっと確かである。立教にいるからこそ行くことができ、感じる事ができるものをこれからも大切にしていきたいと思う。



交換留学生が本校に

2月7日(火)に来校した、Wolverhampton 校の短期留学生。昨夏は立教生が短期留学しましたが、今回は7名の生徒を本校に迎え、朝食から授業への参加など全て立教生と1週間生活を共にしました。彼女たちのために放課後の時間を使って茶道部や剣道部によるミニ・イベントが開かれるなど、日本の伝統文化の紹介も積極的に行われました。

日本語を学んでいる彼女たちは、ひらがなは十分に分かり、漢字も書けます。あっという間に過ぎてしまった最終日の晩は、全校生徒へパワーポイントを使ったプレゼンテーション。彼女たちの学校生活や、イギリスで流行している音楽やドラマ、映画俳優など、英語と日本語を交え、多岐にわたる内容を楽しく紹介してくれました。最後は質疑応答で会場は大いに盛り上がっていました。



イギリス人と英語で
コミュニケーションを

英語科 プロジェクト



これが本来の「英会話」

大きな敷地に点々と建物が散在する「エルムブリッジ村」——ここは引退したお年寄りの方々が住む小さな村。でも老人ホームとは程遠い。そこをゆつたりと歩く人々、小さなメインストリートを車で走り抜ける人々は皆、しつとりと落ち着いた雰囲気漂うロマンスグレーの紳士、淑女だ。この日はECの授業の一環で、高二がここに住むお年寄りの方々と懇談をするのになっていった。

早速、挨拶を交わしながらそれぞれのテーブルに分かれて座っていく。生徒二人にイギリス人の方一人、何人かの生徒は一对一で話をするのもできた。十分を目途にどんどん相手を替えていき、出来るだけたくさんの人と話をしていく。スマートな自己紹介から始まり、驚くほどあっさりとお互いの話に入っているようだった。用意し



英語で楽しく会話をする高2の生徒

ていた質問原稿を読んでいるだけの生徒はまずいかなかった。相手の目を見て話をして、英語の練習というよりは、むしろ本当にお互いに思っていることを伝えあうこと自体を楽しんでいるようだった。どのテーブルでも会話は途切れることなく進み、同じ質問から始まったはずの話は、それぞれのテーブルで全く違う方向に盛り上がっていた。日本の話、ホームステイの話、クラブの事や学校の先生の話など。

いくつものテーブルで生徒とご老人たちが話す姿はまるで集団デートゲームのようでもあった。表現の仕方は悪いが、とにかく終始笑顔で楽しそうに話す姿が印象的だった。これが本来の「英会話」だと思った。英語を使って話すことがおもしろい、自分の意志が伝わる、相手に自分の言うことを分かってもらいたい。そんな気持ちの底から不思議な勢いで湧き上ってくる。生き生きと話していた生徒たち、その姿はどこか頼もしくもあった。

手作りの絵皿を製作

近くのスミスブルック・キルムという小さな店や工房が集まったショップエリアのアートスタジオで、手作りの絵皿作りに挑戦した。といつても、ろくろを回して形を作る過程はショートカット。真っ白な素焼きの皿から始めて、各々デザインを考え、色付けをする。

まずはスタジオの方からの説明。絵の具の種類、筆やスポンジの使い方、下書きの方法、はんこやステンシルの使い方…すべて英語だ。生徒たちは理解にほとんど問題なく、耳を傾けていた。



アートスタジオの方が英語で説明

しかし、いざ絵付け開始となると大騒ぎ。デザインは考えてきたものの、あれやこれや友達としゃべりながら色合わせを決めたり、ステンシルを使ってみたりと賑やかながらテキパキと手を動かし、真っ白なお皿はみるみるうちに素敵な作品に生まれ変わっていった。英語のスペルが分からなければ「先生、SPECIALのスペルは？」と英語で尋ね、お皿の絵付けを通じて英会話の実践。英語は授業のみならず、実際に生活で使うもの。生徒たちは遊びながらも、英語が「使える」感覚を楽しめたのではないか。





生徒の書いたレポート



ロープを引いて教会の8つの鐘を鳴らす生徒たち

克蘭リーの教会ツアー

今回の目的地は最寄りの村克蘭リーにある、生徒にとってもお馴染みの場所、セント・ニコラス教会です。

まずは教会の内部を自分たちで見て、ワークシートをうめていきました。

「こんなにじっくり見たのは初めて。」

「これ、何に使うんだろう？」

立教のチャペルにはない教会内の道具や設備を見て、用途を予想したり質問を考えておきます。

今回ガイドをして頂いたのは、セント・ニコラス教会の、バゴットさんとクリスさんのお二人です。お二人にお会いして、まずは全員で挨拶をし、いよいよ二グループに分かれて見学スタート！

片方のグループは、まず鐘のあるタワーへ。教会の壁についた小さなドアを開くと

：ありました。狭い階段が。長く続けられん階段を登り終えると、たくさんさんのロープが垂れ下がった部屋につきます。ガイドさんの説明は全て英語なわけですから、小中学生がすべてを正確に聞きとるのは少し難しい。そこで両グループとも通訳役の生徒を決め、

「みんな、今の英語わかった？ロープには絶対触っちゃだめだって。」

「一般的な鐘は、左右に揺れて鳴るだけだけど、イギリスの鐘は一回転するものが多いんだって。」と皆をリードしていきます。

セント・ニコラス教会にはドレミファソラシドの音色を奏でる八つの鐘があり、毎日十五分おきに鳴るのですが、この日はせっかく見学に来たからと、なんと時間を無視して、生徒たちに鐘鳴らしを体験させて下さいました。八つの鐘のうち、一番重いものはクリスさんの体重の約八倍の重さだそう。鐘から垂れているロープをひくと、あまりの重さにビククリ。逆に引っ張られて、飛んでいかないようにするのに必死でした。

普段なにげなく礼拝に参加している克蘭リーの教会。その歴史は今の教会の一部が建設された一九〇年に遡ります。

「十二世紀?!日本だったら鎌倉時代だよ!」

想像すると気が遠くなるような、古い教会であることを知り、その歴史の重みを感じます。

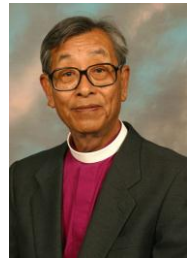
少しずつ形を変えながら、ずっと克蘭リー村を見守り続けてきたこの教会。何世紀にもわたって、多くの人々が礼拝に訪れ、鐘の音色を聴きつけてきたのだらうなと思いを馳せながら、ミニバスに揺られて帰路につきました。



イギリスの町を探る!!

社会科 プロジェクト

チャプレンより



高野主教は立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業には、様々なお話を下さいます。

雨ニモマケズ 高野 晃一

昨年の卒業終業礼拝は三月十二日、東日本大震災の翌日でした。今年は十日で大震災の一周年の前日です。この一年間、よく用いられた「絆」について話し、礼拝や授業で人の生きる意味を考えてきました。先日聖書の授業で生徒に原子力発電の今後、廃止か継続かに就いて考え、文を書いてもらいました。これからも難しいけれど避けて通れない問題です。生徒たちは皆かなり真剣に考え書いていました。

この一年、日本でも世界でも繰り返しく朗読されたものに、大震災との関連から岩手の宮沢賢治さんの「雨ニモマケズ」の詩があります。以前、私はある新聞に「夏休み」という題で依頼され書いた文があります。

「人はときに日常から離れた時間を必要とするようです。普段気づかない全く違った新鮮な視点が開けます。社会人にも学生にも夏休みはその格好の機会であると思えます。私が中学三年生の夏休みの時でした。学校で美術と国語を教えていた田口弘先生に連れられ、同級生二人と岩手の花巻に行きました。終戦後でしたのでリュック

サックにお米を詰め、上野駅から夜行列車に乗りました。

翌朝花巻駅に着き、先ず宮沢賢治さんの「雨ニモマケズ」の詩碑に行きました。弟の清六さんの家を訪ねると、まだ戦後なので訪問者も多くなかったのでしょう。座敷に招き入れてくださり、押入れから童話や詩の原稿、「雨ニモマケズ」の手帳を見せていただきました。自分の手に触れた感触と感激は今も忘れていません。

その後、太田村山口の高村光太郎さんの山荘を訪ねました。高村さんは智恵子さんの縫った袖無しのはんてんを着て、パリ時代の思い出を話されました。かみしめるように話す高村さんの低い声が心に染みこむようでした。膝の上に置き、時々動く大きな手が彫刻そのものに見えました。その夜、近くの小学校の教室に泊めていただきました。あたりが暗くなると村の若者たちが集まって「鹿（しし）踊り」が始まりました。素朴で勇壮。村人たちに

混じって高村さんの姿も見えました。それから岩手山にも登り帰りました。夜明けの月見草が露を含んできれいでした。

その後、高村さんから田口先生宛てに書が送られてきました。「私も其（そ）の見ぬところを望まば、忍耐を持って之（これ）を待たん。ロマ書（第八章二五節）。高村さんが書かれた唯一の聖書の言葉です。旅は私の人生を決する数日となりました。」



最初この「雨ニモマケズ」の背景には、賢治さんが熱心な日蓮宗の信徒であったことから、法華経の「常不輕菩薩（じょうぶきようぼさつ）」があるとされて来ましたが、一切衆生は皆やがて成仏すると尊び、「我、あえて汝等を軽しめず。汝等は皆やがてまさに仏と

なるが故に。」と言って、絶え間ない軽蔑や迫害にもめげずに四衆大衆を礼拝して回った菩薩です。

けれど近年になって、生前親交のあった齊藤宗次郎さんの姿が賢治さんの心の中にあつたのではないかと考えられるようになりました。宗次郎さんは明治十年花巻で生まれ花巻小学校の教師になりましたが、無教会の内村鑑三さんの文に触れてキリスト教徒となり、日露戦争直前に強く反戦論もとな

えました。そのため二十八才のとき教育界から追放され、花巻で書店と新聞店で生計を立てていました。この二十年の間に花巻農学校の教師だった賢治さんとお互いに尊敬し合う親しい交流が続いたようです。

最近発見された宗次郎さんの日記によると、賢治さんは盛岡中学校の学生の時、教会に出入してキリスト教に触れ、宣教師牧師たちとも親しくしていたようです。やがて齊藤宗次郎さんは晩年の内村さんの宣教に協力するため、花巻の人々に惜しまれながら家族で東京に移住しました。賢治さんの心の中には、花巻で「雨ニモマケズ風ニモマケズ」毎日新聞配達をしながら「病氣ノ子供、ツカレタ母、死ニソウナ人、ケンカヤソシヨウガアレバ」、その人々に親身になって尽した宗次郎さんの姿があつたのではないかと思います。

ここは英国なので、今まで授業の中で賢治さんの童話「虎十公園林」「祭りの晩」「セロ弾きのゴーシュ」などを英訳で読みながら、「ベートーベン第六交響曲・田園」も聞きました。授業で読んで訳しながら、私自身胸に深く響きました。私が最初に勤務した教会が福島原子力発電所に近い日立市の教会で、震災後話題になった「常磐ハワイアンセンター」にも子供たちとよく行きました。また阪神淡路大震災の直後、震災復興のため大阪に転任したためでしょうか。これからは賢治さんの童話も読み人にとって「本当の幸せ」の何かを生徒たちと共に考え学び続けたいと思っています。

お知らせ

今年は本校創立 40 周年、下記の通り記念式典と記念コンサートを行います。
ご都合がよろしければ是非お越し下さい。

- ◆ 40 周年記念式典：7 月 7 日(土) 午前 10:30 本校チャペルにて
- ◆ 40 周年記念コンサート：11 月 17 日(土) 午後 6:00 ロンドン St.John's Smith Square にて
(詳細につきましては eikoku@rikkyo.w-sussex.sch.uk までお問合せ下さい。)

メールマガジンご希望の方はホームページの (www.rikkyo.co.uk) 「メールマガジン配信登録」から登録ができます。

立教英国学院通信を電子配信に切り替えたい方は、infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk までご連絡下さい。